

端野で唯一の劇場

「豊稔座」について(その1)

○「豊稔座」の誕生

「健康な娯楽や文化の向上を目指し」端野に劇場「豊稔座」が誕生したのは、昭和四（一九二九）年九月でした。

設置及び経営者は、端野村に駐在した元警察官・直江伊三男氏で、場所は、端野駅前でした。

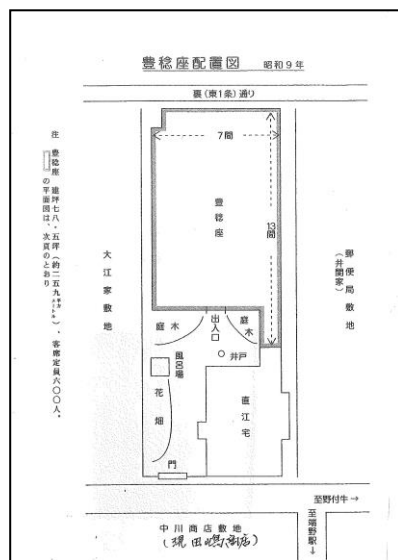
落成祝いの柿落とし（こけおとし）（舞台開き）は、九月の秋祭りに行われ、片岡仁左衛門一座が来演しました。

この一座は「当時かなり有名で簡単に田舎へくるような役者ではなかったはず」（志賀惣吉談）と、新端野町史に記されています。

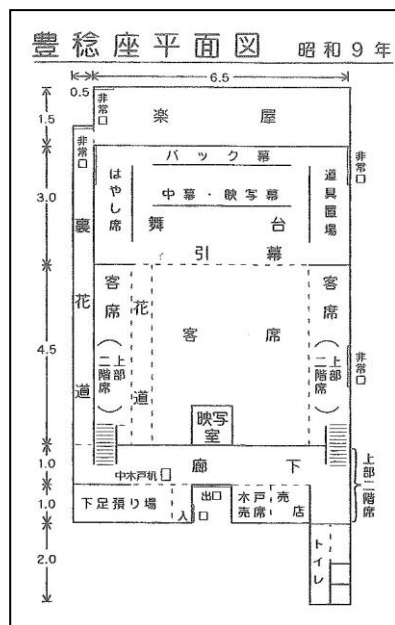
この豊稔座の開館により、お祭りや盆正月の特別な日以外でも、野付牛（現北見市）まで出向くことなく、芝居や演芸（浪曲く浪花節、民舞、奇術、手品など）、活動写真（映画）等を観て、楽しむことができるようになりました。



見取図



配置図



平面図

※各図については、

「豊稔座の思い出」より転記

新端野町史編集のため、平成五（一九九三）年に、当時、北見市在住の直江二郎氏（豊稔座経営者・直江伊三男氏の次男）に、豊稔座に関する資料の提供方をお願いしたところ、同氏から「豊稔座の思い出」として文章が寄せられました。この文章を、同氏の了解を得て冊子として、端野町歴史愛好会が発刊しました。

○戦後の娯楽

大正、昭和前期時代、野付牛町には劇場として「北見劇場」「有楽座」、活動写真（映画）の常設館「神田館」がありました。野付牛まで出向いて芝居や演芸、活動写真を観るといのは、祭りや盆、正月ぐらいなもので、しかも一部の方で、一般的に贅沢なものでした。

当時、端野での演芸、娯楽の催しといえば、春、秋祭りに小学校の室内運動場や各字区の集会所、または神社の境内に野外の舞台を組み青年団の人たちによる演劇や民謡、舞踊の外、村内の小学校の室内運動場や端野駅前にあった「門脇運送店」の倉庫を会場に催された活動写真や田舎回りの芝居や演芸の巡業ぐらいでした。

○豊稔座の最盛期は昭和前期

豊稔座は、都市の劇場とは異なり、毎日興行する常設館ではありませんでした。端野村は純農村であったことから、経営者は、興行を農繁期から避け、

天候や農作物の作柄も留意し、村民に喜んでいただける興行を選ばなければなりませんでした。

開館当初は、実演興行（芝居、浪曲、民謡と民舞、奇術、手品など）と活動写真がよく来演しましたが、実演は活動写真に比して巡回団一行の人数が多い上、宿泊、食事など受け入れ態勢が整っていないければならず、かつ多数の観客を見込まなければならぬため、活動写真に比して興行回数は年に数回しかできなかったと言われています。しかし、実演興行、特に芝居は人気があり、歌舞伎の「東屋」「紀伊国屋」「大竹劇団」などはお祭りやお盆に合わせての興行でした。

「芝居の興行日には、遠方から、しかも木戸を開く一時間前から観客が集まり、近くの志賀さん（現・菓子工房 Shiga の前店舗）や中川商店（現・田嶋商店）に立ち寄り買い物をし、木戸が開くのを待つ人が多く、やがて、劇場の二階のベランダで「ドドン、ドドン、ドドガドン、ドン」と客呼びの太鼓が鳴り、客がにぎやかに押しかけた」と、「豊稔座の思い出」に記されています。

この東屋と紀伊国屋は、昭和八（一九三二）年ごろまでの来演で、その後に来演した大竹劇団も歌舞伎で名子役が「石童丸」や「継子劇」などを演じ、客人の涙を誘ったと語り継がれてきました。

また、浪曲では、広沢虎造や寿々木米若などの弟子たちが来演し、客層は年配者が多かったと言われています。豊稔座全盛期は、開館してから昭和八年ごろまでで、「先代萩」「勸進帳」「石童丸」「忠臣蔵」「弁天小僧」などの人気芝居の来演でした。

参考文献

新端野町史

（平成十年十月十日発行、端野町）

豊稔座の思い出

（平成五年九月発行、

端野町歴史愛好会）